

疑問や驚きをもち、考えたくなる社会科の授業

美作 健悟*

Social Studies Lesson That Encourages Students to Think with Curiosity and Surprise

MISAKU Kengo*

(Received January 15, 2009)

キーワード：中学校社会科、授業づくり、表現、資料の活用、発問

はじめにーめざす授業像ー

公民的分野の経済学習の導入で、「キャラメルの溝」を取り上げたことがある。キャラメルには、格子状の「溝」が付いていることを誰もが知っているし、そのことをごく当たり前のことだと思っている。けれども、あの溝は、何のために付けられているのだろうか。「そう言われてみれば、なぜだろう」という疑問がわいてくる。「包み紙をはがしやすくするためだろう」という予想はすぐに思いつく。しかし、溝が「原料とも関係している」という事実を示されると、「ええ、本当に」と驚くのである。

調べていくと、キャラメルの溝には、二つの意味があることがわかる。一つは、日本は湿度が高いため、溝がなく、つるんとした表面では包み紙をはがれにくくなる。そこで、溝を付けることで包み紙をはがれやすいようにしているのである。

もう一つは、キャラメルが商品として登場した大正時代、主たる原料である砂糖の価格が不安定であったからである。そのため、砂糖の価格が高い時は溝を深くし、一粒の分量を調節した。形や大きさをかえることなく、キャラメルの価格を維持し、利益を上げるための企業の工夫であった¹⁾。

このように、私たちには、何ら疑問をもつことなく、ごく当たり前だと思っていることがある。しかしながら、「見ているが意識して見てはいない」「知っているようだがよくわかっていない」ということがある。そして、自分がよく見ていないことや、よくわかっていないことに気づいていないことも多い。そこで、「見ている」「知っている」と思っていることをあらためて生徒に問うてみたい。すると、生徒自身の認識が揺さぶられ、疑問が生じたり、驚きを感じたりすることで、「考えてみたい」「調べてみたい」という意欲が高まるのである。そして、考え、調べていくうちに、「自分の考えを確かめたい」「友達の意見を聞いてみたい」という意欲がさらに高まってくる。このような意欲を、「追究の意欲」と定義したい。

こうした「追究の意欲」をもつ生徒こそ、私たちがめざしている「自己を表現したくなる」

* 山口大学教育学部附属山口中学校

生徒の姿だととらえた。なぜなら、社会科の授業では、漠然と事象を見るのではなく、視点や立場を明確にして事象を見ようとしたり、視点や立場を変えて事象を見ようとするため、自ら「考えてみたい」という意欲をもって学習することが必要だからである。このような学習によって、それまで見えなかった事象の新たな側面や問題点を見つけ出すことができるようになる。この学習体験の積み重ねが、事象を多面的・多角的にとらえることのできる眼を育てるのである。この眼が養われることで、社会に存在するさまざまな事象への関心が高まり、関心をもった事象について、自分なりの考えをもとうとするようになる。このような、社会に関心をもち、「考えてみたい」という意欲をもった生徒を育てたいと考えた。

以上のような考え方にたち、「追究の意欲を引き出す社会科の授業」、生徒の立場に立てば、「疑問や驚きをもち、考えなくなる社会科の授業」をめざした。

生徒自らが「考えなくなる」ようにするためには、「見ている」「知っている」と思っていることに疑問を投げかけ、生徒の認識を揺さぶることが大切だと考える。その鍵となるものが、教師の手立てである。教師の手立てには、教材選択・開発、資料の活用、発問、板書など、さまざまなものがあるが、本稿では、「資料の活用」と「発問」について2つの授業を例にしながら述べていく。

1. 「資料の活用」－『大日本帝国憲法の成立と民衆』の授業から－

1-1 授業構想の意図

生徒たちに「明治時代はどんな時代か。」と尋ねると、「日本が生まれ変わった時代」「政治のしくみが変わった時代」「欧米諸国から新しい文化や技術が入ってきた時代」というような答えが返ってきた。生徒たちの多くが、明治時代は西洋化・近代化が進み、人々の生活が豊かになった時代であると見ていたのである。しかも、そのような大きな社会の変革を担ったのは、明治維新で活躍した薩長土肥の出身者で、明治新政府の要職にある人物たちだという認識をもっていた。

確かに、明治の社会変革は、「富国強兵」「殖産興業」のスローガンのもと、欧米列強に負けない国づくりを早急に進めることをめざして行われた。一見すると、地租改正、学制、徴兵令、官営工場の設立、大日本帝国憲法の制定などは新政府主導で行われ、民衆は否応なく新しい国づくりに駆り立てられたように思える。しかしながら、労働者として日本の工業発展を支えたのは民衆であるし、彼らは時に、地租改正、学制、徴兵令に対する反対一揆を起こすこともあった。また、憲法に基づく議会政治をめざして自由民権運動を展開し、憲法の制定と国会開設を政府に迫った。このように、民衆の力が明治の社会変革を促したという事実も見逃すことができない。

そこで、民衆の視点を中心に据えて明治の社会変革について考える授業を構想したのである。これまでとは違った視点から社会的事象について考える体験を通して、生徒たちには多角的に歴史を評価しようとする眼が育ってくると考えた。

1-2 授業の実際と考察

この授業は、大日本帝国憲法の成立を当時の民衆がどのように見ていたかを考察し、民衆にとっての憲法制定の意義をとらえることをねらいとした授業である。この授業では、

2つの資料を活用した。

1つは、右の資料(図1)である。これは、大日本帝国憲法が公布される前の1886年に、小林清親という画家が描き、「团团珍聞」という新聞に掲載された風刺画で、「草庵の花嫁」という題がつけられている²⁾。風刺画は、世の中の出来事を皮肉ったり、からかったりするなかに、物事の本質をついているものが多い。この「草庵の花嫁」という風刺画も、民衆の視点から、大日本帝国憲法を痛烈に批判している。



図1 風刺画

生徒たちは、大日本帝国憲法に対して、民衆にとってあまり良い憲法ではないというイメージを漠然ともっていた。それは、大日本帝国憲法のもと、日本が戦争の道へと歩んだということから抱いているイメージである。しかしながら、憲法の制定過程やその内容についてはよくわかっていないこともある。そのような生徒たちに、この風刺画は、憲法の制定過程とその内容に関心を抱かせる資料となる。

生徒たちは、風刺画から、「見えない花嫁の顔」「大きく裂けた花嫁の口」「花嫁の着物に書かれたけんぼうの文字」「おじいさんのわし鼻」「花嫁と手をつないでいるおばあさん」「大勢の人が覗いていること」などを読み取っていった。そして、「憲法が民衆に秘密裏に作成されたこと」「一部の人の手によって憲法が作成されたこと」「ドイツの憲法を参考にしたこと」など、憲法の制定過程をつかんでいった。また、大勢の人が覗いていることから、「多くの民衆が憲法に関心を寄せていたこと」をつかんだ。さらに、憲法を表す花嫁の口が大きく裂けていることに着目し、「その内容はどのようなものなのか」という関心が高まった。

このように、この風刺画は生徒たちの知的好奇心をかき立て、大日本帝国憲法の制定過程とその内容をつかませる資料であった。しかし、これではまだ、民衆にとっての憲法制定の意義には迫ることはできていない。そこで、もう1つの資料を提示した。

右の資料(図2)は、「憲法公布上野賑」と題された錦絵である。この錦絵には、1889年2月11日、大日本帝国憲法の公布を祝って仮装行列を行う東京市民のようすが描かれている³⁾。憲法の制定過程と内容をつかんだ生徒たちにとって、この憲法は民衆が喜ぶようなものではない。したがって、憲法が公布された当時、民衆が盛大なお祝いをしているこの錦絵を見たとき、「この人たちは、いったい何を喜んでいるのか。」という疑問がわいてきて、民衆の気持ちを考えたいのである。



図2 錦絵

まず、憲法が制定されたこと自体に注目し、「憲法によって国が変わる、良くなるという期待があった。」「自由民権運動のひとつの成果が認められた。」など、既習事項と関連させながら考えた生徒たちがいた。また、憲法の内容をもう一度見直し、「法律の範囲内という規定はあるが、人権が認められたことは、民衆にとって喜ぶべきことだ。」と考える生徒もいた。こうして、民衆にとっての憲法制定の意義に多角的に迫っていくことができたのである。

このように、この錦絵は、生徒たちに民衆の視点から大日本帝国憲法をとらえ直させる

資料であった。

この授業が、生徒自ら「考えたくなる」授業として成立するための鍵は、2つの「資料」にある。「知的好奇心をかき立てる資料」や「視点を明確にする資料」を的確な順序で提示していくことで、生徒の追究の意欲は高まり、事象を多面的・多角的にとらえようとするのである。

2. 「発問」－『金閣と銀閣』の授業から－

2-1 授業構想の意図

室町幕府は、3代将軍義満の時に全盛期を迎える。義満は、1392年に南北朝合一に成功し、1397年、西園寺家の山荘を譲り受けて北山殿とよぶ別邸をおいた。別邸とはいえ、その規模は御所に匹敵し、政治中枢の全てが集約されていた。その中心となるのが金閣である。金箔が貼られた華やかな金閣の姿は、強大な幕府の権力と富を象徴している。

一方、銀閣は、8代将軍義政によって、1489年に北山殿金閣にならって造営された。この時期は、民衆が成長して一揆が頻発するとともに、守護大名や戦国大名の領国支配が強化され、幕府の支配力が弱体化していった時期である。銀閣は侘び・さびの世界を表現した東山文化最高峰の建造物であるが、もの寂しげな雰囲気を漂わせるその姿は、幕府権力の衰退や下剋上の風潮とも重なり合う。

このように、金閣と銀閣は、室町時代を代表する文化財というだけでなく、室町時代の社会の変化を象徴的に映し出しているのである。そこで、金閣、銀閣と室町時代の社会の変化を関連づけることで、室町時代の時代像をつかんでいく授業を構想することができると考えた。

その際、生徒の金閣、銀閣に対するそれまでの見方に着目した。ほとんどの生徒たちは、金閣と銀閣の名前を知っているだけでなく、写真や映像でその姿を見たことがある。そして、金閣には金箔が貼られ、その名の通り金色に輝くとともに豪華な建物で、銀閣はその名とは異なり銀色ではないと知っている。生徒たちにとって、銀閣は、質素な建物としか映っておらず、「銀閣には銀箔が貼られていない」ことは当たり前のことであるのだ。

このような生徒の認識を「どうして、金閣には金箔が貼られているのに、銀閣には銀箔が貼られていないのか。」「銀閣は、銀箔を貼れなかったのか、貼らなかったのか。」という二つの発問によって揺さぶることで、「考えてみたい」という意欲を高めることができると考えた。生徒は、「銀箔が貼られていない銀閣」という事象と、「銀箔が貼られていない根拠」となる事象とを関連づけて説明しようとする。事象と事象との関連が見えてきた生徒は、自分の考えを他者に伝え、確かめたくり、他者の考えも聞きたくなる。このようにして、室町時代の時代像をつかんでいくことができると考えたのである。

2-2 授業の実際と考察

授業の導入部で、金閣と銀閣の写真を見せた。そして、建てた人物、年代、場所などを確認した後、写真からわかる金閣と銀閣の違いを尋ねた。写真を見て、気づくことを出し合うので、社会の知識量に関わらず発言することができる。生徒たちは、写真を見なくてもわかるとでも言わんばかりに、「金閣は金色、銀閣は茶色。」「金閣には金箔が貼ってあり、銀閣は銀箔が貼られていなくて木のまま。」「金閣は3階建てで、銀閣は2階建て。」

など、その材料や造りに注目して意見を述べた。すると、「同じ室町時代の建物なのに、どうしてこんなに見た目が違うのだろう。」とか、「銀色ではないのに、どうして銀閣と言うのだろう。」という声があがった。今まで、そういう建物なのだととらえていた生徒たちは、「どうしてだろう」と疑問をもちはじめ、その理由を考えなくなったのである。そこで、次のように発問した。

どうして、金閣には金箔が貼ってあるのに、銀閣には銀箔が貼られていないのか。

この発問によって、生徒たちのもつ「金閣は金色で銀閣は銀色ではない」という既存の知識が揺さぶられ、「考えてみたい」という追究の意欲が高まり、多様な反応をみせた。すでに学習した内容と関連づけて考えたり、金閣と銀閣を比較して思いついたり予想したりしたことを、次々にあげていったのである（図3）。

金閣に金箔が貼られた理由として、次のような意見をあげた。

「義満の好み」「日明貿易による利益で資金が十分にあったこと」「南北朝合一に成功し、幕府の全盛期を迎えたこと」などである。これらの意見から、「金箔が貼られたことと、室町幕府の経済力が高まったことが関連する」と、考えが一致した。

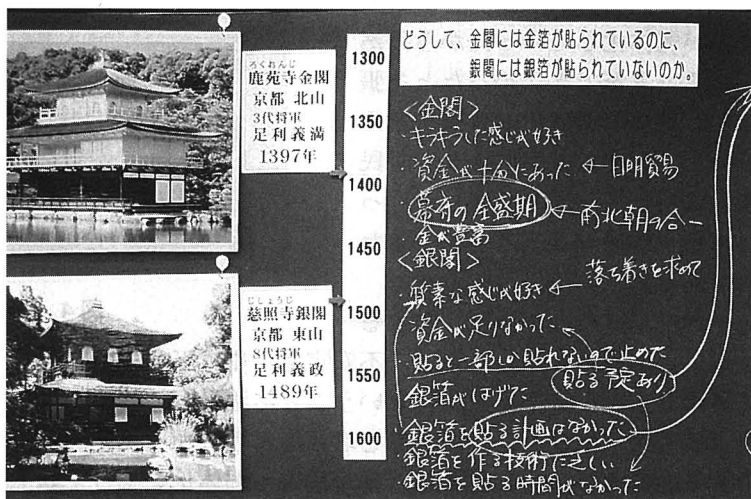


図3 授業の板書

一方、銀閣については、次のような意見をあげた。

「銀箔を貼る費用が足りなくなった」「銀箔を貼る時間がなかった」という意見である。これらは、「銀箔を貼りたくても、貼ることができなかった」という考えである。また、次のような意見もあがった。

「義政は質素な感じが好きだった」「銀箔を貼る計画は、最初からなかった」という意見である。これらは、「銀箔をあえて貼らなかった」という考えである。金閣については、意見が一致したが、銀閣については意見が2つに分かれた。

ここまでの生徒たちは、それぞれが建てられたころの幕府の経済力に注目している。しかしながら、室町時代の前半から後半にかけての幕府権力の変容や、室町時代の文化の変容にまでは、まだ目が向いていない。

そこで、銀閣に焦点を絞り、対立する2つの意見を取り上げて、次のような発問を行った。

銀閣は、銀箔を貼れなかったのか、貼らなかったのか。

この発問は、銀閣に焦点が絞られ、「貼れなかったのか、貼らなかったのか、どちら

か。」と対立軸が明確である。しかも、「良いか、悪いか」といった個人の価値観に左右されず、客観的な根拠が必要となる。そのため、生徒たちは、「銀閣」という事象と、「銀箔が貼られていないことを説明するための根拠」となる事象とを関連させて考えようとする。こうして、「この事象とこの事象との関連が見えてきた」と、生徒の思考が深まっていくのである（図4）。

「貼れなかった」とする生徒は、「応仁の乱の前後より、政治が不安定となり、幕府の力が衰退していった。」とか、「経済の発展にともない民衆が成長し、自治を行ったり、一揆を頻発させたりして幕府の力が弱まった。」と、幕府権力が弱体化していったから銀箔を貼ることができなかったと主張した。幕府の弱体化の背景を考えていくことで、「応仁の乱」「民衆の成長」「一揆の頻発」といった事象を関連づけることができたのである。

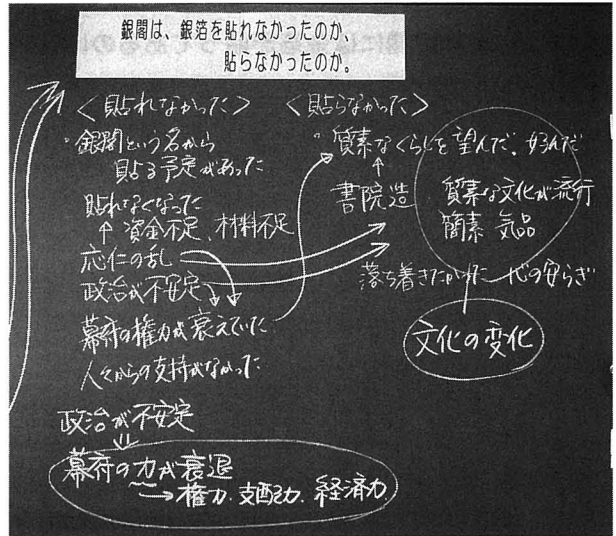


図4 授業の黒板

一方、「貼らなかった」とする生徒は、応仁の乱後の「政治の不安定さ」や「下剋上の風潮」から、「心の安らぎを求めて質素な文化が流行した。」ということに注目し、初めから銀箔を貼るつもりはなかったと主張した。侘び・さびの世界を求めようになった室町時代の文化の変容に着目してその背景を考えていくことで、「幕府権力の弱体化」や「下剋上の風潮」といった事象を関連づけて考えることができたのである。

この授業が、生徒自ら「考えなくなる」授業として成立するための鍵は、2つの「発問」にある。授業の主眼は、室町時代の社会の変容をつかむことであった。この主眼をそのまま、「室町時代の社会の変化をあげてみよう。」というような形で発問すると、生徒たちはなかなか焦点が定まらず、「何を言っているかわからない」とか、「何を言ってもいいようで、かえって言いにくい」となり、「考えたい」という意欲はわいてこなかったであろう。そこで、金閣と銀閣という室町時代を代表する文化財、つまり文化という視点から切り込み、生徒の認識を揺さぶることを試みた。そして、生徒の中に生まれた素朴な疑問や対立する考えを、発問という形で生徒に投げ返すことで、室町時代の社会の変容に迫っていったのである。

また、2つの発問には、次のようなつながりがある。第1の発問「どうして、金閣には金箔が貼られているのに、銀閣には銀箔が貼られていないのか。」は、生徒のもつ既存の知識を揺さぶり、多様な反応を引き出す発問であった。続く第2の発問「銀閣は、銀箔を貼れなかったのか、貼らなかったのか。」は、第1の発問に対する生徒の多様な反応を整理して焦点を絞り、生徒の思考を深める発問であった。このように、2つの発問につながりをつくることによって、生徒は思わず本気になって考えなくなり、新たな認識を得ようとするのである。

おわりに

社会科の学習指導要領にある目標は、「公民的資質」の基礎を培うことである。公民的資質とは、主権者としての自覚をもち、平和で民主的な社会を主体的に築いていこうとする資質や能力をさす⁴⁾。これを本校社会科では、「社会に参画する力」とよんできた。すなわち、社会に関心をもち、自分たちの手でより良いものに改善し、築き上げていこうとする力であるにとらえている。私たちが、社会科の授業をとおして、生徒に育てたい力は「社会に参画する力」である。

私たちが求めている社会に「参画」する生徒の姿は、今ある社会を単純にそのまま受け入れ、何ら疑問も抱かずに生活していくような姿ではない。学習したことが、自分と関わることとして関心をもち、他者の意見も聞きながら自分の考えをつくっていこうとする姿である。これが、生徒たちにとって、社会への参画の第一歩であると言える。この社会に関わろうとする原動力となるものが、「考えてみたい」「自分の考えを確かめたい」という追究の意欲だと考えているのである。

本稿では、追究の意欲を引き出し、育てる社会科の授業づくりについて述べてきた。生徒の認識を揺さぶって疑問や驚きを生み、「考えてみたい」という意欲を喚起するために、「資料の活用」と「発問」が重要であることを確かめることができた。もちろん、生徒の追究の意欲を引き出す手立てはこれだけではない。教材の価値を見抜くこと、生徒の反応を解釈しながら的確に組織していくこと、生徒の思考の流れに沿った板書をつくることなど、授業をつくる力が必要である。今後、生徒自らが「考えなくなる」授業から、生徒が思わず「考えてしまう」授業をつくっていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 河原和之『「ウソツ」「ホント」からはじまる公民学習』日本書籍 1991
- 2) 朝日新聞社『朝日百科 日本の歴史 10 近代Ⅰ』p. 61
- 3) 朝日新聞社『朝日百科 日本の歴史 10 近代Ⅰ』p. 73
- 4) 文部科学省 中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）解説 社会編